

# パプアニューギニア高地における ブタ飼養の現在的意味

●  
梅崎 昌裕

## はじめに

パプアニューギニア高地タリ盆地においては、サツマイモ耕作を中心とした生業が250年前に成立して以来、ブタが重要な家畜として飼養されてきた。その背景としては、野生動物資源の枯渇した環境においてブタが貴重な動物性タンパク質供給源としての食生態学的な意味をもっていたこと、さらには、頻発する戦争の補償あるいは婚姻にともなう交換財としてグループ間の社会的関係維持に重要な役割を果たしてきたことなどが指摘されている。ところが1970年代より顕著になった「近代化」の過程で、地域のインフラ整備がすすみ、現金経済の浸透と人口増加にともなう環境劣化が顕在化し、人々の生存システムは大きく変容してきた。この過程で、「ブタ飼養の意味」がどのように変化してきたかを検討することが本稿の目的である。

著者が収集したデータと1970年代に行われた先行研究を比較した結果、以下の3点が明らかになった。すなわち、1970年代から1990年代にかけて、①人口増加にともなう食料生産性低下の影響で1人あたりブタ飼養数は減少し、②購入食品の導入によりブタの食生態学的重要性は相対的に低下した。それにもかかわらず、③婚資あるいは戦争補償として用いられるブタの数は増加した。これらの結果は、パプアニュー

ギニア高地タリ盆地における「近代化」の過程で、ブタの生態学的重要性は低下したのに対して、社会的重要性はむしろ増加してきたことを示すものである。本稿では、このような変化を引き起こした「近代化」の具体的な諸側面に注目しながら、パプアニューギニア高地におけるブタ飼養の現在の意味を考察していきたい。

## 1| パプアニューギニア高地 におけるブタ飼養

パプアニューギニアは、ニューギニア島の東半分と数多くの島嶼部で構成される国である。人々の居住域は島の全域に及ぶものの、特に居住密度が高いのは海岸部と標高 1200 メートルを超える高地部である。後者は、通称パプアニューギニア高地 (Highlands) と呼ばれ、行政的には東高地州、西高地州、南高地州、エンガ州、チンブ州の 5 州から構成されている (図 1)。

北岸にある商業都市レイ (Lae) を起点として南高地州西端のコピアゴ (Kopiago) まではいわゆるハイランドハイウェイが走り、沿線にはゴロカ、マウントハーゲン、メンディなどの町が発達している。高地の代表的な換金作物であるコーヒー・紅茶、そして天然ガス・材木などは、このハイランドハイウェイを通じてレイへ運び出され、そこから海外へと輸出されている。輸出によってもたらされた現金は、高地地域にいわゆる「近代化」をもたらし、ここ数十年で生業や社会のシステムは大きく変化してきた。特にレイに近い東高地州ではシステムティックなコーヒーと紅茶の栽培が行われており、州都ゴロカには何軒ものスーパーマーケットが建ち並び、バスが近隣の村とゴロカの間をたくさんの人々を乗せて往来している。逆に、南高地州などレイから遠い場所では、換金作物の栽培も小規模なものがほとんどであり、近代化の程度は低い。

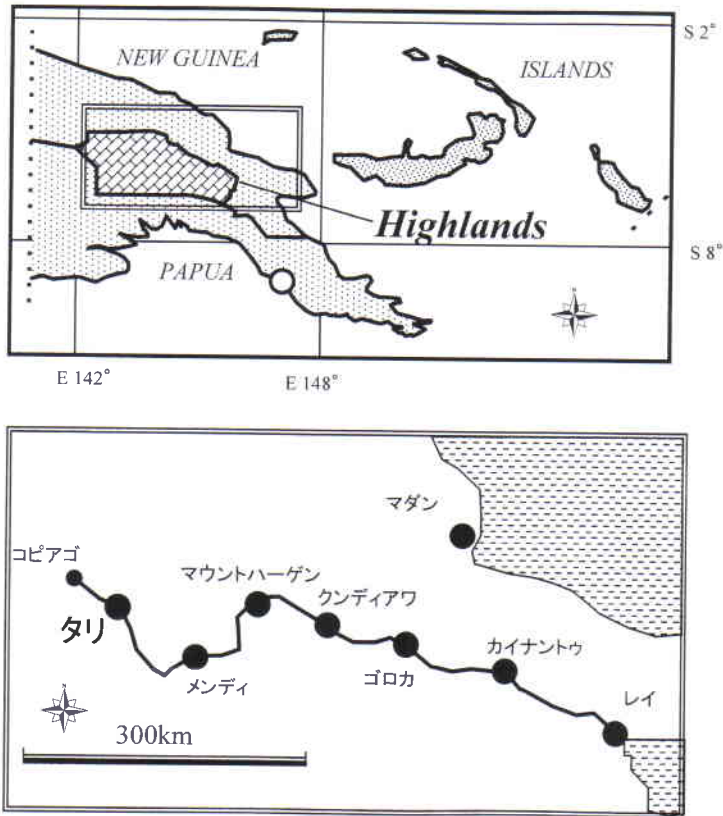
本稿の対象地域である南高地州・タリ盆地は、パプアニューギニア高地のなかでも近代化の遅れた地域である。商業的中心であるタリ飛行場周辺ですら数件の店と政府の役所があるだけであり、そこから少し離れるとサツマイモ畑にブタがつかねがれ茅葺きの家屋が散在する農村風景が広がる。飛行場の周りでも、前を布で隠し後ろを植物の葉で隠した男が、腰にヒクイドリの骨でつくった棒を刀のように差し、首の後ろにサイチョウのくちばしで作った首飾りをたらし、鳥の羽や花で装飾された大きなカツラをかぶって闊歩してくるし、市場では草を乾かして作ったプルプルというスカートを付けた女性がサツマイモの山を売っている。少なくとも表面的には昔とそれほど変わらない生活を人々は送っているようにみえる。

高地地域における主たる生業は、サツマイモ農耕とブタ飼養である。大林 (1999) は、東南アジアからオセアニアにかけてのブタ飼養を、栽培植物の種類と他の家畜との組み合わせから以下の 3 つに類型化している。

- I. ブタ+イモ型
- II. ブタ+イモ+穀物型
- III. ブタ+牛類+イモ+穀物型

パプアニューギニア高地地域におけるブタ飼養は、この類型でいえば「I. ブタ+イモ型」の典型例であろう。この型は、メラネシア・ポリネシアの他、東南アジアではベンガル湾のニコバル諸島民やスマトラのメンタウェイ諸島民などにみることができ (大林 1960)。パプアニューギニア

図1 パプアニューギニア高地



高地においては、サツマイモに対する依存とブタ飼養の集約性が他地域よりも顕著であり、サツマイモとブタと人間の相互関係は高地地域の適応システムの中核を成しているといえよう。主食にするサツマイモの摂取エネルギー割合は、高地地域のほとんどの集団で70%を超え、なかには90%を超える集団さえある (Bourke 1989)。また、サツマイモはブタの餌として用いられ、全収穫の半分以上をブタの餌に費やす集団も多い (Kuchikura 1994)。

パプアニューギニア高地におけるブタと人間の関係性においてユニークな点は、両者が同じ資源をめぐって直接的な競合関係にあるということ

ある。そもそもブタ飼養が定着農耕文化と結合して存在する理由のひとつとして、ブタが人間の食べ残しなどによって生存できることが指摘されている (大林 1955)。また、中国におけるブタ便所にみられるように、ブタ飼養には人間の排泄物を有効利用するという側面も強い (西谷 1998)。もちろん、パプアニューギニア高地におけるブタも、人間が食べ残したサツマイモの切れ端や人間が草陰に残した排泄物を食べることもある。しかしながら、人口よりもブタの数が多いために栄養学的にみれば排泄物の寄与はわずかなものである。パプアニューギニア高地におけるブタは、人間によって耕作・収穫されたサツマイモにほぼ全面的に依

存して生存し、しかもそのために人間が相当の労働力を費やしている。手間暇をかけるわりには、人々がブタを食べるのは婚姻や戦争の和解などの限られた場面に限られており、日常的な生活の中で食べるためにブタを屠殺するようなことはほとんどない。

パプアニューギニア高地におけるブタ飼養の意味については、数多くの人類学的・人文地理学的な仕事が行われている。そのきっかけとなったのは、バイーダ、リーズ、スミスによるアメリカ民族学会での報告である (Vayda, Leads, and Smith 1961)。彼らは、①ブタは重要なタンパク質源としての意味をもっている、②屠殺されたブタが集団の成員にひろく配分されることにより集団内におこりうる不均一な食物摂取を緩和する可能性がある、という仮説を提示し、その後の実証的な研究を促した (Hide 1980)。1960年代から1970年代にかけて行われた「ブタ飼養の意味」に関する研究は、おおきく以下の2通りに分けて考えることができるであろう。

①**ブタ飼養の社会文化的必然性に注目したもの**の代表的なのは、交換財としてのブタの重要性を強調したものである。例えば、“Moka”や“Te”と呼ばれる儀礼においては、交換財としてブタが用いられる。この交換儀礼において、多くのブタを抛出することによって成員は社会的名声を獲得することができる。ブタをたくさん飼養することはそのための前提条件であるとされた (Strathern 1971, Meggitt 1972)。一方、Modjeska (1982) は、南高地州ドゥナにおける研究で、人口増加にともなう過密居住によってグループ間の争いが多発し、その和解に用いるためのブタの需要が高まり、より多くのブタが飼育されるようになるとした。より多くのブタを飼育するためにはより多くの農作物生産量が必要となり、それにとともなう土地不足がさらにグループ間の争いを増加させ、ブタの需要がさらに高まったと説明された。

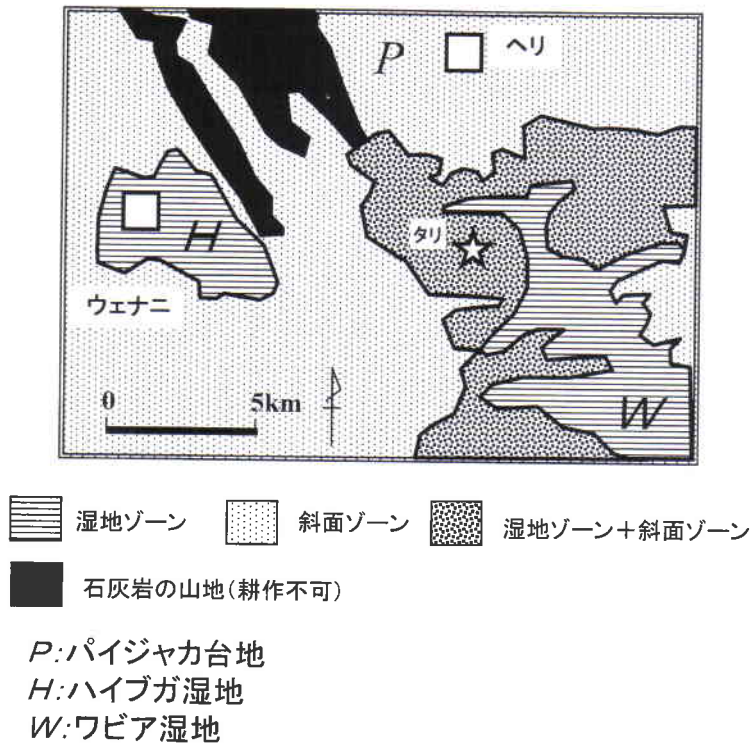
②**ブタ飼養の栄養学的な寄与を強調したもの**  
例えば、野生動物が得られない高地社会においてブタは重要な動物性タンパク源であるとするもの (Rappaport 1968)、あるいは余剰食糧の貯蔵庫であるとするもの (Hardestry 1977) などが代表例である。

1960年代から1970年代にかけての高地地域では、いわゆる伝統的な生活が維持されていたはずである。人々はブタの交換あるいは大量屠殺をとまなう儀礼を行い、ブタ以外には動物性タンパク質が乏しい状況に生きていた。当時の調査研究は基本的にこのような「伝統的」社会におけるブタ飼養の意味という視点で行われた。ところが、1990年代になると、高地から都市への移住者が増加し、現金経済の浸透による価値体系の変化がおこり、ブタ以外にもタンパク質を豊富に含む缶詰などの購入食品が手にはいるようになった。このような1960-1970年代に行われた研究とは全く対照的なコンテクストにおいて、改めて高地社会におけるブタ飼養の意味を検討するのが本稿の目的である。具体的な調査は、ヘリ、ウェナニという2つの親族集団 (フリでハメイギニと呼ばれる単位、後述) において行った (図2)。2つのハメイギニは全く異なった生態学的環境条件に生活している。ヘリが位置するパイジャカ台地は、タリの飛行場から北側の山の斜面に位置し、近年、土壌劣化が深刻である。対照的に、ウェナニはタガリ川沿いにひろがる肥沃なハイブガ湿地に位置している。

## 2| タリ盆地における人々の歴史・社会システム・生業

まずは、先史時代におけるタリ盆地へのヒトの移住、およびその後の環境と生業変化の関連性、そしてブタ飼養が人々の生業にどのように組み込まれてきたかということについて、大塚 (1995)、口蔵 (1995) によるパプアニューギニア全体を対

図2 タリ盆地における生態学的ゾーンと調査対象地



象としたレビュー、あるいは Haberle (1998) によるタリ盆地での考古学的調査報告を参考にしながら整理しておきたい。

標高 1200 メートル以上のパプアニューギニア高地における考古学的発掘調査地のなかで、最も古い人間居住の証拠が発見されたのはコシペ (Kosipe) であり、ここでは約 2 万 6 千年前の石器がみついている。さらに、8ヶ所の遺跡では 1 万年前から 2 万年前の、20ヶ所では 1 万年前より新しい居住跡がみついている (Haberle 1998)。したがって、現在のところ、パプアニューギニア高地に人々が進出し始めたのは少なくとも 2 万 5 千年前、それが本格化したのは約 1 万 5 千年前頃であったと考えられている。タリ盆地においては、約 2 万 1 千年前からヒトが居住した可能

性があり、高地の中では居住の歴史の始まったのが比較的早かった地域であるといえる。そのころの人々は、絶滅した大型の有袋類 (ディプロトドンズ類など) の狩猟とニューギニア島原産の植物 (パンダナスなど) の採集に依存しながら生活していたはずである。

西部高地州のクック遺跡では、農耕が行われていた証拠としては世界でも最も古い約 9000 年前の相位から水利システムが発見され、このころニューギニア原産のフェイ・バナナ、パンダナス、サトウキビなどが栽培されていたと考えられている (Golson and Gardner 1990)。タリ盆地においても、標高 1630 メートルに位置する 8500 年前の層から、当時の気候条件では標高 2400-3100 メートルの範囲にしか生育していなかったはずのパン



ダナス (*Pandanus brosimos*) がみつかり、このころからパンダナスの栽培化、ひいては農耕が進行した可能性が高い。今日、パンダナスはタリ盆地において嗜好品として食べられる程度であるが、フリ語にはパンダナスの細かい分類体系が残されており、これは過去に於いてそれが重要な食べ物であったひとつの証拠であるといえる (Powell and Harrison 1982)。その後、タリ盆地では1700年前から森林の攪乱がさかんに行われるようになり、900年前になると、今日タリ盆地で土壌の肥沃さを維持するために最も重要な樹木であると考えられているモクマオウ (*Casuarina oligodon*) の植樹が始まったようである。このころ栽培されていたのは東南アジア原産のタロであり、フリ言葉で畑をさすマブという言葉が、タロ (マ) を集めて植える (ブ) という意味をもっていることにもこの名残がある。

今日の主食であるサツマイモ栽培が始まったのは約250年前である。1930年代のパトロールレポート (オーストラリア政府によるもの) をみると、当時の人々は主食としてのサツマイモに加えて、多くのタロを畑に栽培していたことが記されている。また1970年代はじめの農学的な調査報告書にも、タロはサツマイモに次ぐ重要な作物であると記されている (Powell and Harrison 1982)。ところが、1993年から1995年にかけての著者の調査期間中、タロは家の周りの湿った土地にわずかに植え付けられている程度にすぎなかった。

ブタがパプアニューギニア高地に現れるのは遅くとも約6000年前である。出土した骨はすでに家畜化された形態を示すと報告されており、東南アジア原産のイノシシが家畜化されてから人々とともに渡ってきたものであると考えられている。パプアニューギニアにおけるいくつかの通文化的研究から予測されることは、サツマイモが導入される前のタリ盆地では、おそらく今日よりはるかに

ぶん粗放な方法でブタが飼養されていたということである。例えば、現在、パプアニューギニアの中で、タロがサツマイモに置き換わりつつあるような地域、あるいはそこに隣接して依然としてタロに依存しているような地域では、飼養されているブタの数は高地に比べて圧倒的に少なく、人々が飼養するのはメスブタと去勢したオスブタに限られている。メスブタに対する種付けは村の外で野生化したオスブタによって行われる (秋道 1993, Akimichi 1998)。また、生態学的ないくつかの証拠が、サツマイモ農耕の集約化とブタ飼養方法の変化との関連性を示唆している (Kuchikura 1999, Morren 1977, Modjeska 1982)。

タリ盆地には、フリ語を話す人々が生活してきた。パプアニューギニアにおける1言語族あたりの平均人口がおよそ6千人であるのに対して、フリは人口7万人を超える大きな言語族である。彼らにとっての行政的・商業的中心はタリという町で、標高が1650メートル、北と東を3000メートル超の山並みに囲まれ、南と西はいくつかの山をこえてニューギニア島南岸へとつながっている (図2)。

南高地州の西半分を撮影したランドサット衛星写真をみると、タリ盆地付近では、自然環境に対する人間活動の影響が顕著であり、付近一帯で森林が完全に消失し、かわりに草原や畑などが一面に広がっているようすが明らかである。盆地には北側の山地を源流とするたくさんの河川が流れこんでおり、その流域には肥沃な沖積湿地帯が広がっている。また、タリの飛行場から南西に位置するワビア地域には東側の山上湖から流れ込んだ土壌に覆われた広大な地域が存在し、沖積湿地帯とならんで人口稠密な耕作地帯となっている。タリ盆地における残りの部分は、なだらかな起伏のある台地状の地域であり、渓谷沿いの部分を除けば平均斜度が20度を超える場所はまれである。

人口密度は、沖積湿地帯およびワビア地域など土壌が肥沃な地域とタリ飛行場に近い部分で高く(1平方キロメートルあたり 200-400 人)、その他の部分ではタリの中心から離れるほど低くなっていく。北側と東側に広がる山地には標高 2200メートルあたりまで人々が住んでいるものの、そのような居住域の辺縁部では森の中に畑や家が散在している程度である。

フリ語を話す人々は、200 以上のハメイギニ(ハメ=兄弟、イギニ=子供)と呼ばれるグループに分かれて生活している。ハメイギニは土地の所有単位であり、その土地を使用する権利をもつ親族集団を指し示す名前である。また通常、土地の名前についてもハメイギニの名前が用いられる。それぞれのハメイギニは、現在からおよそ 5-10 世代さかのぼって到達する父系始祖の名前で呼ばれることが多い。始祖より前の世代は「人間」ではなく、サツマイモを知らずタロイモや木の皮を食べる人々だったといわれている。1 世代の平均交替間隔が 25 年と仮定すれば 10 世代前の始祖が生きていた時期(すなわち人々がサツマイモを食べ始めたと考えられている時期)は今から 250 年前と推定されるが、これはタリ盆地においてサツマイモ耕作が 250 年前に始まったとする考古学的証拠とおおよそ一致する。人々の語る家系図が生物学的な事実とどれだけ一致しているかについて本当のところはわからないが、サツマイモの導入が人々の生活を大きく変えたとする Watson (1965) の「サツマイモ革命 (Ipomoea revolution)」仮説とも合致する話である。

それぞれのハメイギニは始祖の子孫全てを潜在的な構成員としている。しかしながら、潜在的な構成員が新しくハメイギニの土地に畑を開いたり家を建てたりするためには、少なくともそのハメイギニの始祖との家系図的つながりを矛盾なく説明できる必要があり、自分の直接の先祖が実際にそのハメイギニの土地で生活していた証拠(先祖

が畑の周り掘った溝、畑の周りに植えられた樹木、先祖の墓など)を指し示す必要がある。さらにはふだんから戦争への参加、婚資の拠出などを通してそのハメイギニに貢献していなければならない(Glasse 1968)。通常、一人の個人は複数のハメイギニに対して所属の意識を持っており、そのうちのいくつかには家や畑を作っている。ハメイギニは婚姻の単位でもあり、自分が所属の意識をもっているあるいは構成員として認められているハメイギニの異性とは結婚しない。

ハメイギニはさらに細かくハメイギニエメネと呼ばれるグループに分けられていることが多い。ただし、両者は固定的なものではなく、人口サイズの拡大したハメイギニエメネが昇格してハメイギニと考えられるようになることもあるし、ハメイギニエメネ同士の戦争が引き金になって、それぞれが独立したハメイギニとして考えられるようになることもある。しかもグループをハメイギニとするかハメイギニエメネとするかは状況に応じて使い分けられる側面が強く、例えば、ひとつのハメイギニの中のハメイギニエメネ A に属する男と B に属する女が結婚したいと申し出た場合、「もはや A と B はそれぞれ独立したハメイギニである」とみなされて結婚が許可されることがある一方で、他のハメイギニとの争いが発生した場合には、A と B が「自分たちは同じハメイギニである」と一致団結することもある。ハメイギニの分裂・独立は、タリ盆地の肥沃な部分で顕著であり、標高が高く土地の痩せた部分に比較すると人々が規定するひとつひとつのハメイギニの面積が極端に小さくなっている。

タリ盆地における農耕は、基本的にサツマイモ耕作が中心である。その方法には大きく分けて 2 通りのスタイルが存在する。ひとつは山の斜面において行われる方法で、一次林あるいは二次林を切り開いて火を入れて作った畑を数年間耕作した後、放棄し休耕させる、いわゆる焼畑的な農耕で

表1 成長段階別のブタの呼称

呼び名	平均的な月齢	平均的な売買価格(キナ)	大きさの表現
Nogo igini	4ヶ月未満	10	母ブタの後をついてまわる段階
Nogo pabini	4-6ヶ月	30	腕に抱ける段階
Nogo adogoni	6-11ヶ月	70	脇に抱える段階
Nogo pajeni	11-17ヶ月	110	肩に担ぐ段階
Nogo ireni	17-36ヶ月	200	棒を使って2人で担ぐ
Nogo irianahabe	36ヶ月以上	300以上	棒を使っても2人で担げない

ある。畑には直径が30センチメートルの小さいものから10メートルを超える長いものまで様々な大きさと形のマウンドがつくられ作物が植えられる。森林から開いたばかりの畑(エイマ)は肥沃であり、ここにはマメ類、トウモロコシ、緑の野菜、カボチャなどサツマイモ以外の作物も積極的に植えられる。集めた落ち葉を覆うようにつくった小さなマウンド(ティンディニ)、あるいは特定の樹木(クバロ [Ficus sp]、フビ [Ficus sp]、タバジャ [Albizia falcataria] など)の切り株のまわりにつくられた直径3メートル以上の大きなマウンド(パンドパンド)は特に肥沃であるとされる。エイマは数年間の耕作を経てサツマイモの単作となり5-10年後に放棄される。この地域においては十分な二次植生が生育するためには最低15年の休閑期間が必要であると考えられているが、今日では土地不足のために休耕期間を10年以内に短縮せざるを得ない状況にあり、それともなう耕作地の生産性低下が人々の生活を脅かしつつある(Umezaki et al. 2000)。

もうひとつの農耕システムは平坦な湿地帯で行われる方法である。これらの湿地帯では、深さ2-3メートルの溝を掘ることによって土壌の水分含有量を適当なレベルまで下げることが重要な作業となる。湿地帯には幅の広い溝が大きな川にむかって何本も掘られていて、畑を取り囲む溝からの水

が流れ込んでいる。湿地帯に新しく作った畑など土壌水分量が特に多い場所では、畑の中にも小さな溝が縦横に掘られ、そこから周りの溝に排水されるような構造がとられている。ほとんどの畑が少なくとも100年以上連続的に耕作されてきたといわれており、しかも単位面積あたりの生産性は山の斜面につくられる畑の2倍以上である(Wood 1985)。ただし大きな川に近い部分につくられた畑は、洪水で水没する可能性が高く、場合によってはサツマイモが全滅したり、畑そのものが使用できなくなることもある。

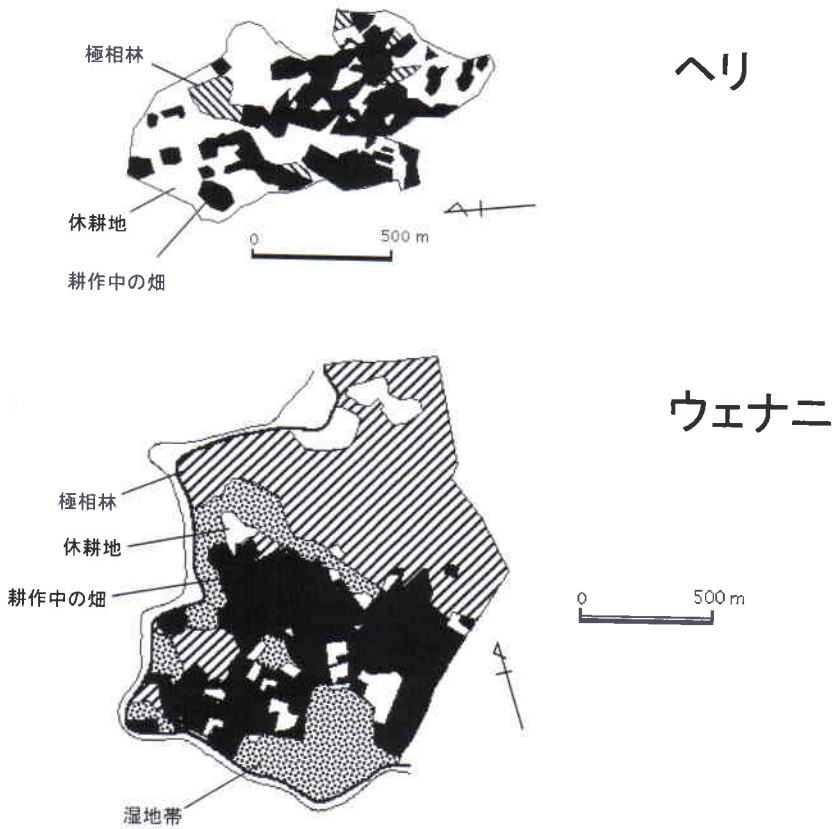
### 3| 舎飼されるブタと放し飼いのブタ

タリ盆地におけるブタは、その生殖にかかわる全てが人間によってコントロールされている。ハメイギニの中には去勢されていない生殖能力のあるオスブタが数頭飼養されていて、生殖を望むメスブタの持ち主は、このオスブタに種付けを依頼し、生まれた子ブタのうち一頭を種付けブタの持ち主に渡す。

フリ語でブタはノゴ(nogo)と呼ばれる。表1に示すように成長段階に応じてブタの呼び名はそれぞれ異なっている。ノゴイギニ(nogo igini)は母親のあとをついてまわる子ブタの時期であり、その後、ノゴパビニ(nogo pabini)からノゴアドゴニ(nogo adogoni)へと成長する。最も味



図3 ヘリとウェナニの土地利用



がいいのはこのノゴアドゴニくらいの大きさであるといわれる。戦争の補償などにおいて成熟しているブタ（メスブタはアウギビニ（augibini）、オスブタはワンガベ（wangape）と呼ばれる）としてカウントされるためには、最低でもノゴパジェニ（nogo pajeni）よりは大きくなければならぬとされ、さらに婚資として用いる際に成熟しているブタとしてみなすことのできるのは基本的にノゴイレニ（nogo ireni）より大きいものである。

ブタ飼養の方法には舎飼と放し飼いの2通りがある。具体的な調査対象としたヘリとウェナニという2つのハメイギニのうち、ヘリにおいては十

分な大きさの極相林あるいは湿地帯が存在しないこともあり、ブタは全て舎飼されるのに対して、ウェナニにおいては舎飼のブタと放し飼いのブタが両方存在する（図3）。舎飼されるブタ（ノゴタビジラ、nogo tabijila）は、夜は家のすぐ横に作られたブタ小屋に1頭ずつ入れられていて、朝になると小屋から出され、サツマイモの収穫が済んだあとの畑などへ連れて行かれる。ブタはそこで地面を掘り返し、収穫されずに残っていたサツマイモのほか地虫なども食べる。太陽が高くなると、今度は日陰に繋ぎ直されて昼寝をしたり、水の近くに連れていってもらって泥浴び（ノタ打ち）をしたりする。そして夕方はブタ小屋に連れ

て帰られて、サツマイモの餌をもらうのである。ブタの餌には、基本的には、サツマイモのなかでも小さいクズイモが優先的に使われるが、人によってはブタが早く成長するようにと人間が食べてもよいようなイモをゆでて与える場合がある。

一方、ウェナニには湿地帯や極相林に放し飼いにされているブタもいる。舎飼だけでは面倒をみきれないほどにブタの数が増えた場合に、数頭のブタを放し飼いにするのだといわれる。ただし、放し飼いにするブタの持ち主は、自分のブタが他人の畑に入り込まないように、湿地と畑を隔てる柵のメンテナンスなどに責任を負わなければならない。放し飼いのブタは、昼間は好き勝手なところで地面を掘ったり昼寝したりしている。飼い主がサツマイモなどの餌を与えるのは、2-3日に一回のペースであり、舎飼に比べると餌をもらえる頻度が少ない。飼い主が餌を与える場所は決まっていて、餌やり日の夕方になるとブタはその辺りに集まっていることが多い。また、少し離れた場所にいる場合でも、呼べば餌場に集まってくる。しかしながら、餌をやりに行ったものの自分のブタがそこに集まってこない場合もよくある。スワンプや極相林の遠くまででかけたブタが、単に帰ってこなかっただけのこともあるが、すでに盗まれて食べられている場合も多い。村人によると、盗むのはたいてい若い独身男性のグループであり、ほとんどの村人は若い頃回かかにはブタを盗んで食べた経験があるという。この話になると、人々は具体的に盗んだブタの持ち主の名前と殺したブタの様子をあげながら、いかに自分がうまく切り抜けたか、ブタの持ち主がどんなに悔しがっていたかを、自慢げに話すのが印象的であった。盗んでしまえば滅多に食べられないはずのブタを自分たちだけで大量に食べることができ、しかもブタは飼い主の目の届かないところで放し飼いにされているのだから、盗む気持ちも分らないわけではないが、万が一、盗みが発覚すると最悪の場合、戦

争に発展し、盗みの当事者は（その親族の援助をうけてではあるが）戦争補償で逆に大量のブタを支払う羽目になる。

放し飼いのブタはある程度成長すると、力も強くなり人間の指示に従わなくなるので、足に縄を結んで舎飼に戻すことが難しくなる。したがって、生きた状態で婚資あるいは戦争補償として使うことができなくなるのである。このようなブタを利用するためには一度屠殺しなければならず、婚姻や戦争和解などにもなう宴会で行われる石蒸し料理に使われることがほとんどである。大きなブタを殺すには弓矢を使うが、フリの人々が使う弓矢は基本的に戦争用であり、鍬が木や竹を細く削ったものでできていて殺傷能力が弱い。このような矢をつかかって放し飼いのブタを倒すのはなかなか難しく、ある時、放し飼いの大ブタを殺しにいった時などは、まずは囲いの中におびき入れるのがひと騒動で、囲いに閉じこめた後は、逃げ場のないブタに対して柵の周りから何本も矢を打ち込んだものの、ブタは体中に矢を突き立てられてなお、なかなか倒れはしなかった。著者は、狩猟民でもあるパプアニューギニア北部、東セピック州コンビオ族の男が、幅の広い鉄製の鍬をつけた矢を至近距離から急所に打ち込み野ブタを一発でしとめた現場に居合わせたことがあるが、それに比べるとフリのブタ殺しはすこしばかり迫力に欠けるとことがある。

湿地や極相林はハメイギニのコモンズであり、ハメイギニのメンバーは湿地や極相林のどこにでもブタを放し飼いにできるのが原則である。ただし、何らかのきっかけでハメイギニエメネ間で争いがおこった場合、そもそも湿地帯や極相林は誰のものかという話にまで争いが拡大する場合も多く、1993年の段階でウェナニの湿地・極相林のなかには、その利用が特定のハメイギニエメネに制限されている場所も多かった。しかも、その中でもさらに細かい利用権の争いがくすぶっている

場合が多く、そのような場所では、ブタを放すことはできるが畑を新しく開くことは完全に禁止されていた。

#### 4 | 戦争補償としてのブタ・婚資としてのブタ・手打ちのブタ

著者が具体的な調査を行ったヘリにはラル、ワペ、ワムリア、ヘワという4つのハメイギニエメネが、ウェナニにはマディジャ、ハロバ（ただし場合によっては、さらにパリ、バジャブ、アレ、パリアに分かれる）、ヒルア（場合によってはパリア、パンゴリア、ハレリに分かれる）という3つのハメイギニエメネが存在し、ハメイギニの中では土地をめぐる小競り合いが繰り返されている。

ハメイギニのなかのグループ分けは必ずしも固定されたものではなく、その時々の問題の所在によってかなり流動する側面をもっている。例えば、1993年の段階では、ウェナニハメイギニには、ひとつの土地争いを軸にして、マディジャ+ハロバ vs ヒルアというグループ分けが存在していた。この時、マディジャとハロバはお互いの畑などを訪問しサツマイモ耕作を共同で行ったり収穫をやりとりしたりしていたが、マディジャーヒルア、ハロバ+ヒルアの間ではそのようなことはあり得なかった。それが1994年になると、マディジャとハロバの別の土地争いのほうがより重要視されるようになり、こんどはマディジャvsハロバ+ヒルアというグループ分けが成立し、ハロバとヒルアはマディジャという敵を得て和解することになった。

前に説明したように、フリの人々は通常、複数のハメイギニに畑をもっている。特にパイジャカ台地など人口密度の低い地域に居住する世帯のなかには、ひとつのハメイギニの土地でサツマイモを収穫し終わるとそこに新しいサツマイモの蔓をうえつけ、別のハメイギニの土地に移動するといっ

表2 ウェナニとヘリの人口変化

ハメイギニ	エメネ	1978	1995
ウェナニ	マディジャ	18	33
	ハロバ	49	75
	ヒルア	35	48
	その他	1	2
	合計	103	158
ヘリ	ラル	40	46
	ヘワ	0	4
	ワペ	8	24
	ワムリア	7	3
	その他	2	0
	合計	57	77

た移動的な生活パターンをとるものが多い。このような生活を送る世帯は複数のハメイギニの土地に畑だけでなく家も持っている。例えば、1993年8月にヘリに家をもっていた22世帯のうち13世帯はヘリ以外のハメイギニの土地にも家を維持していた。そして、1993年8月から1995年2月にかけての18ヶ月の間に、上記ヘリの13世帯は全て複数のハメイギニの土地を実際に移動していた。対照的に、ウェナニの43世帯のなかにウェナニ以外のハメイギニの土地に自分の家をもっているものはほとんど存在しなかった。

表2にウェナニとヘリにおける1978年11月と1995年1月の人口を示す。1978年11月の人口は、カラー航空写真を用いて家の場所を特定し、すでに収集してあった家系図をもとにして、その家の持ち主で当時ヘリあるいはウェナニを主な居住地にしていた人々を特定することにより推定した。1995年1月の人口は、元旦にウェナニおよびヘリに滞在していた人を数えることによって推定した。ハメイギニ単位の人口は移動による変動が大きいため、これらの人口サイズは厳密な意味を

もちえないが、1970年代から1990年代にかけてヘリあるいはウェナニで人口が増加してきたことだけは間違いない。

ハメイギニ間、あるいはハメイギニエメネ間の戦いは、今日でもいろいろなきっかけで発生している。典型的な例では、土地の耕作権をめぐるもの、不倫疑惑をめぐるもの、放し飼いのブタを盗んで食べてしまったことに始まるものなどが挙げられようが、実際には日常の些細なできごとから始まることの方が多い。例えば理由がどうであれ2人の男が喧嘩して一方の男が死んでしまった場合などは、まず戦争は避けられない。すなわち、死んだ男の所属するハメイギニメンバーは、殺した男側のハメイギニメンバーを誰でもいいから殺そうとする。この時、誰をハメイギニメンバーと認定するかが重要であり、例えば敵のハメイギニメンバーは殺した側の男が所属していたハメイギニに（意識のうえでの）家系上のつながりをもっていた男性全員となるわけで、一人の男が家系上のつながりを意識しているハメイギニは通常10を超えることを考えると、総数はかなりの数に達することになる。逆に、死んだ男の味方をするハメイギニメンバーも、全く同じ理屈で大変な数に膨れ上がる。殺した側と殺された側の男性が住んでいた近隣のハメイギニの住人は、ほとんどの場合、上のどちらかのメンバーに該当するものであり、仮に両方のハメイギニに所属している場合はどちらに味方するかを表明しなければならない。どうしても戦いに参加したくないものは、遠くに避難したり、首都のポートモレスビーに飛行機で逃げるしかない。地域を二分した戦争が始まると、それぞれ拠点とする男の家に味方が集まってきて集団生活をはじめ。戦闘態勢が整う前であれば、逃げ遅れた敵の男を殺傷能力の高い矢（待ち伏せ用；竹でできた幅広の鏃がついている）で殺すこともできるが、ひとたび敵味方に分かれた後では、遠くの敵を正確に狙えるような飛翔能力の高い矢

（細い鏃がついており殺傷能力は低い）を用いた空中戦になるために、戦争といってもそれほど人が死ぬことはなかったといわれる。ところが近年では、警察から略奪した鉄砲や、自分たちで自動車のシャフトを加工してつくった散弾銃などが利用されるために、戦争がおこると確実に数人の犠牲者がでる。そして戦争期間は長引く傾向にある。

しばらく戦争状態が続いたあと、敵味方で死んだ数が同じくらいになり、疲れてきてサツマイモも不足し始めると、もう十分戦ったから和解しようということになる。戦争終了にともなって重要なことは、味方の中で犠牲になった人の所属するハメイギニに対して、戦争のきっかけをつくった本人が戦争補償を行うことである。上の例で殺された男（Aとする）の所属しているハメイギニに味方をして犠牲になった男（Bとする）の補償は、Bを殺した敵側のハメイギニでなく、Aの所属しているハメイギニによって行われる。補償を払うのは、Aの所属するハメイギニのうちBの所属するハメイギニを除いたものの構成員であり、それを受け取るのはBの所属するハメイギニのうちAの所属するハメイギニを除いたものの構成員である。補償にはブタとお金がいられる。2000年4月の段階で、1人の男が死んだ場合にやりとりされる標準的なブタの数は成熟したブタ90匹と成熟前のブタを180匹であるという（フリにおける数え方は15進法である）。多くの場合、これらの戦争補償は、当該ハメイギニに所属する人々の拠出によってすみやかに支払われるが、死んだ男の教育レベルが高い場合や、定収入を得ていた場合などは、補償のブタの数とお金の額が凄まじいレベルに跳ね上がり、支払いが完全に終わらない場合もある。そのような場合は、道沿いの目立つところに支払いが済んでいないことに対する抗議の棒が立てられたりする。

一方、婚資として男性側のハメイギニが女性側のハメイギニに渡すブタとお金も、戦争補償と同



様に男性自身が抛出するほか所属するハメイギニメンバーから抛出される。例えば、1999年に特別な教育歴のない女性と結婚した男性は、成熟したブタを18匹と成熟前のブタを9匹、そして現金を300キナ（1キナ=50円、1999年）支払ったという。花嫁が高等教育をうけて収入のある場合や、男性の側が学校の教師などをしていて支払い能力が高い場合などには、婚資の額は一気に値上がりするようである。

ブタは日常的な小さないざこざを解決する際にも用いられる。1997年にタリ盆地出身の男が南高地州の州知事に当選し、「タリに新国際空港を建設し、我々は国際観光都市を目指そう」と演説して以来、タリ盆地では村レベルでゲストハウスを建設することが一種のブームになった。ウェナニ・ハロバの人々もこの流れで、1998年頃、小さなゲストハウスをつくって週に数人のペースでお客をとっていた。しかしながら、営業開始から3ヶ月ほど過ぎたある夜に、ゲストハウスは何者かに放火され、翌朝には焼け跡となったのである。ハロバの人たちは放火犯人を特定しようと捜査を続け、ついにウェナニ・ヒルアグループがゲストハウスの成功をねたんでやったことだと断定した。ヒルアグループは放火への関与を否定したが、ハロバ側は放火の責任をとれとせまり、両者の関係は険悪化、一発触発の状況が続いた。ところが、結局は、ヒルア側がウェナニ側に成熟したブタ3匹（1匹のノゴイレニと2匹のノゴバジェニ）を渡すことで和解することになったのである。この場合、ヒルア側は放火の事実を認めたわけではなく、またハロバ側もヒルア側を許したわけではない。どちらかというと同じウェナニハメイギニ内での戦争を回避するために、今回のことはうやむやのままでもいいから手打ちをしたいという双方の姿勢を実現させる形で、ブタのやりとりが利用された例であると思われる。

このように、タリ盆地において、ブタがグルー

プ間の関係を円滑にするための交換財として重要視されているのは間違いないであろう。共系的出自によって規定されるハメイギニは多分に「ご都合主義的」な側面をもっており、ハメイギニの成員は流動的であるうえに、敵味方の関係も戦争ごとに変化してしまう。このような状況において、争いのケースごとにそれに関わった人間と責任の所在をはっきりさせ、その都度、敵味方の関係を解消していくことは重要であり、その手段として、争いに参加した人を全てまきこんだ形でブタをやりとりすることはフリの社会システムが成立するための重要な行動であるに違いない。

ただし、ブタを飼養する現在の動機として忘れてはならないのは、村人たちがブタをまとまったお金を手に入れるための重要な手段であるとも考えていることである。タリの市場には、婚資としてあるいは戦争補償としてブタを必要とする賃金労働者を対象にしたコーナーがあり、ここで大きなブタを売れば500キナほどの現金を獲得することができる。タリ盆地にはコーヒーなどの換金作物もないではないし、サツマイモなどの作物を市場で売ることも多いが、所詮1度に手に入るお金は数キナにすぎない。「なぜブタを育てるのか」という著者の直接的な質問に対する答えで最も印象的だったのは、「ブタを売ればポートモレスビー（首都）へ行く飛行機のチケットを買うことができる」、「ブタを売れば子供を高校に通わせることができる」など、まとまった現金獲得手段としてのブタの重要性を強調したものであった。ここで注意しなければならないのは、生きた状態であれば500キナで売れる大ブタでも、それを屠殺して切り身として売るとおよそ200キナほどにしかならないということである。ブタの食糧としての価値が200キナであるとすれば、残りの300キナは、そのブタを手に入れた人がそれを婚資としてあるいは戦争補償として抛出した時に得られる賞賛あるいは獲得される名声の代金であるとも考えるこ



とができる。現金獲得手段としてのきわめて現代的なブタ飼養の意味を支えているのは、交換財としてのブタを認める伝統的な価値観なのである。そして、逆に、現金獲得手段としてのブタの魅力が、交換財としてのブタの重要性を支えている側面も見逃すことはできないであろう。

## 5| 御馳走としてのブタ

ヘリとウェナニにおける人間1人あたり飼養されているブタの数は、ヘリが0.6匹(1994年9月)に対してウェナニは1.2(1994年11月)~1.5匹(1995年2月)であった。この値は成人1人あたりに換算すると、それぞれ1.8匹、3.4~4.1匹となり、ウェナニの方がヘリに比べて2倍以上のブタを飼養していることがわかる。

これらのブタが人々にとってどれだけの栄養学的意味を持っているのかを検討するために、ウェナニの9世帯(ハロバとマディジャの全世帯)とヘリの12世帯(ヘリ南部の調査地域に居住していた全世帯)を対象にして1994年9月から11月の間に7日間の直接秤量法による食事調査を行った。この方法は集団レベルの栄養素摂取量を推定するのに適した方法であり、次のような手順で行われる。1. 対象世帯の所有する全ての食糧を1日2回(朝食前と夕食後)秤量する。2. 午前6時から午後7時までの13時間を直接観察時間とし、その間に世帯に持ち込まれた/持ち出された食糧を全て秤量する。3. 観察時間に対象者が食べたもの、ブタに餌として与えたもの、他の世帯に分配したもの、捨てたものをそれぞれ別々に秤量する。調査に於いては、すべての秤量において記録された重量の整合性があるかどうかを常にチェックした。例えば、朝食前に存在していた食物の量から朝食で食べた量を引いて、それに収穫した量を足して、ブタに餌として与えたものと夕食で食べた量を引いた食物の量が、夕食後に世帯に存在した全ての食物の量に一致すれば、観察時間にお

ける秤量調査が正確に行われたことを意味するのである。観察時間以外に食べた食物の量は、聞き取りでほしいの大きさ/量を答えてもらい、前日の夕食後の秤量データと翌日早朝の秤量データの差を参考にしながら推定した。(詳しい食事調査の方法は、Umezaki et al. (1999)を参照。)

パプアニューギニア高地の東部では、ブタは儀礼としての大量屠殺によって消費されることが多いのに対して、タリ盆地においては結婚式や戦争の和解の際に行われる宴会で石蒸しにされたブタがハメイギニメンバーに広く分配されることが多く、個人は少量ながらも頻繁にブタを口にすることがあるようである。また農耕の季節性に呼応したブタ飼養の季節性は観察されない。したがって、本研究で得られたデータは、日常的なブタの摂食パターンを反映していると考えてよいであろう。表3にはウェナニとヘリの人々が1日あたりに食べたブタについて、その重量・エネルギー・タンパク質・脂質の量、およびそれぞれが総摂取量に占める割合を示す。またこの表には参考のために、口蔵幸雄氏(岐阜大学)がウェナニにおいて1993年8-10月に収集した168世帯・日のデータを著者の結果と比較できるように換算したものを示してある(Kuchikura 1999)。明らかなことは、脂身・肉をあわせて考えた場合でも、ブタはフリの日常的なエネルギー摂取には大した寄与をしていないということである(総摂取量の1.7-3.7%)。タンパク質摂取でみても、総摂取量に占める割合はせいぜい2.6-16.4%にすぎない。今日、タリ盆地で利用されている購入食品は、伝統的な食品に比べてタンパク質を豊富に含んでいる。畑作物を売ったお金でそれらを購入した場合のタンパク質摂取にかかわる生態学的効率は、サツマイモでブタを飼養する場合よりも高い(Kuchikura 1999)。畑作物を売るといっても、ほぼ全員が農耕を行っているタリ盆地においては需要に限られているために、問題はそれほど単純

表3 成人男性1人あたりブタ（脂身と赤身）の採取量

	重量 g	エネルギー kcal	タンパク質 g	脂質 g
ヘリ(1993年)				
ブター脂身*	3.1	22 (1.2%)*	0 (0.2%)	2 (10.1%)
ブター肉*	3.4	24 (1.3%)	2 (5.6%)	2 (7.4%)
ウェナニ(1994年)				
ブター脂身	0.0	0	0	0
ブター肉	16.1	114 (3.7%)	9 (16.4%)	8 (24.0%)
ウェナニ(1993年)**				
ブター脂身	5.0	36 (1.2%)	0 (0.3%)	4 (24.0%)
ブター肉	1.8	13 (0.5%)	1 (2.3%)	1 (5.8%)

\* ブタの栄養素摂取量は以下の通りとして計算した：ブター脂身 100g = 710 kcal (エネルギー)、2.6g (タンパク質)、74.3g (脂質)；ブター肉 100g = 217 kcal (エネルギー)、17.5g (タンパク質)、15.1g (脂質)。

\*\* 口蔵幸雄氏(岐阜大学)が1993年8-10月に収集したデータをもとに(Kuchikura, 1999)、著者が成人1人あたりに換算した。

\*\*\* 括弧内は総摂取量に対するパーセンテージ

ではないが、少なくともブタだけが動物性タンパク源だったときに比べて、ブタに対する栄養学的重要性が相対的に低下したのは間違いないだろう。

むしろ注目すべきなのは、総摂取量の17-30%を占める脂質としての摂取量である。パプアニューギニアのように根茎類を中心とした食生活をおくる人々にとっては、「油っぽい」ものというのは大変な貴重品で、それを食べたいという要求が非常に大きいように思われる。例えば、Ohtsuka (1983)によると、ウェスタン州のギデラの人々は狩猟によって捕獲されるヒクイドリの脂肪を何よりも楽しみにしているという。また著者が調査を行った東セピック州コンビオの人々は、標高800メートルの冷涼な気候条件に暮らしているために、ココヤシを植えてもそれが実をつける確率

が極めて低い状況にありながら大量のココヤシを植え付けていた。これらのココヤシは、根茎類や野草を御馳走として料理するさいに用いられるココナツミルクを搾るためのものなのである。ギデラやコンビオなど狩猟やココナツ栽培が可能な地域に比べて、高地のようにそのどちらもできない地域に於いては、このような「油っぽさ」にたいするあこがれがなおさら強いように思われる。野生の動物資源がほとんど存在しないタリ盆地においては、今日利用されている食用油・牛脂缶詰などの購入食品が存在しなかった1970年代より前の時代では、ブタはほぼ唯一の「油っぽい」食料源として利用されていたはずである。食べる際にも、肉の部分と脂身の部分は分けられ、肉の部分はその日のうちに食べてしまうことが多いのに対

表4 平常時と天候不順時のブタ飼養パターン・食物採取の比較

	ウェナニ 平常時#	ウェナニ 天候不順時	ヘリ 天候不順時
総収穫のうちブタに与えられた割合	58%	70%	52%
ブタ1日1匹あたりエサのエネルギー	2280kcal	2064kcal	1545kcal
成人1人あたり摂取エネルギー	2624kcal	3090kcal	1852kcal
総摂取エネルギーのなかで購入食品の寄与	10%	16%	27%

# Kuchikura 1999 より

して、脂身は何日かかけてサツマイモと一緒に食べられる。人々は、肉と脂身は同じくらいおいしいというし、脂身とサツマイモを同時に食べながら人々がみせる「テンデビー（フリ語で「おいしい」という意味の感嘆詞）」といいながら耳たぶを引っ張り首をすくめる仕草にも「油っぽさ」に対する人々の好みがかいまみられる。

このように、栄養学的な寄与があまり大きくないとしても人々の食生活の構成要素としてのブタの意味が、その「おいしさ」ゆえに維持されているのは間違いないであろう。サツマイモで育てたブタの肉は考えられないほど味が良いものである。大量に食べられるわけではなく、しかも育てるには大変な労働が必要であるにもかかわらず、人々がブタを育てる理由のひとつとして、さらにいえば、そもそもブタがパプアニューギニア高地社会で受容された理由のひとつとして、この「おいしさ」は重要なものではなからうか。

実をいうとこの食事調査をおこなった1994年9月から11月にかけては、7月から8月にかけて続いた長雨の影響を受けて盆地全体でサツマイモの生産性が低下した時期であった。例えばヘリのあるパイジャカ台地における市場では、ふだんなら10キログラムあたり1キナ（1995年の時点で、1キナ=80円）で買えるサツマイモが2キナ以上

に値上がりし、ウェナニのあるハイブガ湿地においては、洪水によって川沿いの畑におけるサツマイモが全滅し援助物資として小麦粉と食用油が支給された。このような状況にあって、ウェナニとヘリの人々が、自分たちの飼養するブタをどのように扱ったのかを紹介しておきたい。

表4には、サツマイモの総収穫量のうちブタにエサとして与えられたものの割合、ブタ1匹に1日あたり与えられたサツマイモの量（エネルギー）、成人1人あたり摂取エネルギー、総摂取エネルギーに占める購入食品の割合が示してある（ウェナニの平常時データは Kuchikura 1999 より）。天候不順の影響を受けた時期、ウェナニにおいては河川の氾濫で多くの畑のサツマイモが台無しになり、単位面積あたり収穫量は平常時の約60%ほどであったと考えられている（Umezaki et al. 2000）。それにもかかわらず、成人1人あたり摂取エネルギーは平常時よりも多いほどであり、食生活に対する天候不順の直接的影響はみとめられない。またブタ1匹あたり1日あたりのエサの量も、平常時より約1割低い程度である。著者の観察によると、天候不順の影響でサツマイモの単位面積あたり生産性が低下したのは間違いないが、人々はふだんより多くのマウンドを壊してサツマイモを収穫し、市場へ売りに行き現金を得てい

た分のサツマイモを自分たちの食料とブタのエサにまわすことで、それに対応していたようである。また援助物資として小麦粉などを受け取ったために、総摂取エネルギーに占める購入食品の寄与割合は平常時よりも高くなっている。一方、ヘリでは成人1人あたり摂取エネルギーレベルが非常に低く、人々が深刻な食糧不足に直面していた様子がよみとれる。ブタに与えられるサツマイモの量も、ウェナニの4分の3にとどまっている。総摂取エネルギーに占める購入食品の寄与は27%に達しており、ここにはサツマイモの不足した人々が、町の親戚からの援助送金、あるいは竹で編んだ家の壁、屋根を葺くチガヤの束、斧の棹などを売って得た現金を使って、米や小麦粉などを購入することで何とか食いつないでいたという背景がある。

天候不順時のブタの取り扱いに関して印象的だったのは、わずかなサツマイモを人間とブタに分配する際に、必ずしも人間を優先するわけではないということである。ヘリにおいては人間が平均で1852キロカロリーしか食べられないときですら、収穫のおよそ半分をブタに与えているし、ウェナニにおいても人々は現金収入をあきらめてまでブタに与えるサツマイモを確保しているようにみえる。ヘリにおけるある老夫婦は、収穫できるサツマイモが畑から完全になくなってしまったために、斧の棹をガラス瓶の破片を用いて削りだし、それを市場で売ってお金をもらい食べ物を購入するという生活を送っていた。1本の棹を削るのに2日かかり、それが市場では2キナで売れ、2キナで約10キログラムのサツマイモを買って、それを2日かけて食べるのである。2人はブタを5匹（ノゴパビニ2匹、ノゴアドゴニ2匹、ノゴパジェニ1匹）もっていたために、10キログラムのうち5キログラムのサツマイモはこれらのブタに与え、残りの5キロを2人で2日にわけて食べていた。あえて、この老夫婦に「ブタなんか食べてし

まえばいいのではないか」と聞いてみたところ、「ここでブタを食べてしまえば今までの苦勞が水の泡になってしまう」といわれた。

## 6| ブタ飼養に関わる生態学的・社会的変化

タリ盆地では、特に1990年代にはいってから、年率2%以上の人口増加にともなう土地不足、環境劣化、食料生産性低下などの問題がその深刻さを増してきている。このような問題はタリ盆地におけるブタ飼養にどのような影響を与えてきたのだろうか。

Wood (1985) は、ヘリのあるパイジャカ台地とウェナニのあるハイブガ湿地における1980年頃の一人あたり平均ブタ飼養数を、それぞれ1.1匹、2.2匹と報告している。1994-1995年における著者のデータ（ヘリが0.6匹、ウェナニは1.2~1.5匹。前出）は、いずれのハメイギニにおいてもWoodの報告よりも平均ブタ飼養数が少ないことを示している。タリ盆地における飼養ブタ数には季節性が観察されず、大量屠殺にむけて飼養数を増加させるようなこともない。ブタ飼養数が短期的に若干は変動することを考慮に入れても、1994-95の数は1980年の半分強であり、タリ盆地で平均的なブタ飼養数が減少したのは間違いない。

その背景のひとつとして考えられるのは、人口増加にともなう土地不足・食糧生産性の低下である。1978年から1995年にかけての17年間で、ヘリにおいては耕作中の畑が14.3ヘクタールから27.3ヘクタールに増加し、逆に休耕地は45.4ヘクタールから33.1ヘクタールへと減少した。ヘリに残る一次林は1978年の段階でわずかに4.8ヘクタールにすぎず、1995年にかけてそのうち0.6ヘクタールが耕作地に転換された。このような土地利用の変化から推測されることは、ヘリの人々が休耕期間を短縮することで人口増加にとも

なう土地需要の増大に対応していた様子である。このような休耕期間の短縮によって、畑のほとんどは十分に地力が回復していない草に覆われた休耕地に開かれるようになり、それにともなう食糧生産性の劣化が深刻化している (Umezaki et al. 2000)。一方、ウェナニにおいても 1978 年から 1995 年にかけて耕作地は 38.3 ヘクタールから 46.2 ヘクタールに増加し、休耕地が 26.9 ヘクタールから 20.6 ヘクタールに減少した。それでも、ウェナニにおいては半永久的なサツマイモ耕作が可能であり、このような土地利用の変化が必ずしも土壤の劣化につながってきたわけではない。しかしながら、休耕地の 25%、湿地帯の 63% がエメネ間の土地争いによって使用制限されていること、そして土地争いの対象となっていない残りの二次林や湿地帯のほとんどは耕作しても高い生産性が期待できないような場所 (河川の近くなど) であることから、ウェナニにおいても耕地拡大が時間とともに難しくなってきたことは間違いない。このような食糧生産性の低下、あるいは人口増加に対応した食糧増産が不可能な状況では、ブタに与えることのできるサツマイモの量も相対的に少なくなるはずで、それが結果的に飼養されるブタの数の減少につながったと考えられる。

しかしながら、婚資として男性側のハメイギニから女性側のハメイギニに渡されるブタの数、あるいは戦争補償として支払われるブタの数は、昔に比べてむしろ増えてきたといわれる。例えば、前に紹介したように 1990 年代における戦争補償 (1 人の男が死亡した場合) に必要なブタは 180 匹であるのに対して、1970 年代ごろは 75 匹で十分であり、婚資としてのブタも現在は 30 匹近く必要とされるところが、昔なら 15 匹もあれば十分であったといわれる。

Modjeska (1982) は、タリ盆地に隣接するドゥナ地域におけるサツマイモとブタ飼養を組み合わせた生業の成立過程として、①人口増加にともな

う野生資源 (植物性・動物性) の減少によって生じるタンパク質の不足を、タロイモからサツマイモへの変換をふくむ農耕の集約化とブタの飼育によって補うサイクル (use-value cycle) と、②人口増加にともなうグループ間の争いが増加するに連れて、戦争補償に使うブタに対する需要が高まり、それに対応するために農耕の集約化がすすむというサイクル (exchange value cycle) を想定した。強調されたのは、ブタ数が増加し農耕の集約化が進むことで人口がさらに増加するという自己増殖的なフィードバック機構であり、この説明は、タリ盆地にサツマイモが導入された約 250 年前から 1960 代頃までの生業と社会の変化をうまく説明していると思われる。

ところが、その後の数十年間におこったことは、農耕の集約化とはむしろ反対の、土壤劣化・土地不足・生産性の低下、そして飼養するブタ数の減少である。このことは、ひとつにはサツマイモ耕作とブタ飼養を中心とした生業によって規定されるタリ盆地の人口支持力に、フリの人口が近づいてきたことで説明できるだろうし、もう一方では、首都ポートモレスビーを中心とした都市部の移住者からの送金を含めてタリ盆地全体に流れ込む現金が増加し、米・小麦・魚や肉の缶詰などの購入食品が多く利用されるようになったことも関係しているであろう。この過程で、Modjeska (1982) のいう use-value cycle には、外部からの供給要因が加わり、このサイクルの自己増殖的フィードバック機構は機能しなくなったと考えられる。

本研究の結果が示すように、1 人あたりに飼養されるブタは減ったものの、社会的な場面で利用されるブタは昔よりも増加している。この背景としては、インフラ整備にともなう地域交流の活発化によって人々がより遠距離に居住する親戚とのネットワークを維持できるようになったことが考えられる。現在では当然のように存在するタリ盆



地の中の公共道路が少なくとも 1950 年代までは存在せず、移動するために人々は畑と畑の間に掘られた溝に沿って歩くしかなかった。例えば、現在、ウェナニからタリの飛行場までは、公共の道を 30 分歩いて PMV という乗り合いバスに 20 分も乗れば行くことができるが、公共の道も PMV もない時代にはその 10 倍以上の時間がかかったことであろう。年寄りたちは、「自分たちの若い頃はタリなんか行ったこともなかった。そもそも行く理由がないし、そんなところに行ったら戦争になってしまう」という。毎日何千人という人々がタリ盆地に集まってくる現在とは全く状況が異なっていたに違いない。著者が 1992 年に調査をおこなったコンビオでは、方言語族を超えた婚姻が、1940-59 年には 26%、1960-79 年が 37%、そして 1980-92 年が 68% と次第に増加する傾向がみられた (Umezaki and Ohtsuka 1996)。結婚についても、年寄りが若い頃は、ハメイギニのリーダーが相手を選んでいたといわれ、タリの市場で出会った若い男女が恋におちる現在とは全く違ったものであっただろう。定量的なデータは収集していないが、タリ盆地でも結婚する相手の居住地が次第に遠くなってきたのは間違いないことで、その結果、より遠くの親戚とも関係を維持できるようになり多くの親戚との社会的関係が生じ、婚資としてのブタ・戦争補償としてのブタ数が増加してきたのではないだろうか。婚資としてのブタ・戦争補償としてのブタの数が、他の原因によってインフレーションをおこした可能性もあるが、同時に進行した親戚関係の拡大がなければ現実的にそれに対応することは難しかったであろう。昔であれば伝わらなかった情報が、現在では瞬時に伝わるようになり、20km 離れた所に住む親戚にも婚資の協力を頼めるようになったのである。

Exchange value cycle についていえば、ヘリ地域に比較すると、戦争はより人口密度の高いウェナニ地域で頻繁に発生し、飼養されるブタも

ウェナニの方が多い。従って、人口増加でブタの需要が高まるという説明は、現在でもある程度の妥当性を有していると考えられる。前に紹介したゲストハウスの火事をめぐるハロバとヒルアの争いにおいては、ブタが使われたことによって結果的に戦争は回避された。このような事例は、ヘリよりもウェナニにおいて圧倒的に多く観察されている。

現在、タリ盆地ではブタ以外にも、ヒツジ、ウシ、ニワトリが家畜として飼われているが、いずれもブタに較べると飼養数はわずかなものである。ヒツジはブタの飼育を禁止する原理主義キリスト教徒によって飼育されることがある程度で、それ以外の村人が飼養することはまれである。古い家屋を利用した小屋で飼われ、エサとしてはサツマイモが与えられる (タリ盆地では、犬、猫、ニワトリのエサもサツマイモである)。ヒツジ肉そのものは、ブタに劣らず人々に好まれるが、タリの町でオーストラリアやニュージーランドからきわめて安く輸入されたバラ肉が売られており、わざわざ苦勞して飼養することもないというのが、おおかたの意見である。ウシは 1970 年代に、パプアニューギニアの DPI (Department of Primary Industry) によってタリ盆地に導入された。現在でも、ハイブガ湿地などでは小規模ながらウシが飼われており、現金収入のある男が結婚するときの婚資としてブタに加えて使うこともある。ニワトリは家の周りで放し飼いされるものの他に、小規模な養鶏場において、購入した雛に製品化された飼料を与えることで飼われているものがある。子供の 1 歳の誕生日など、比較的近い親戚だけをよんで行われるパーティーなどでは、このような養鶏場からニワトリが購入され消費される。

タリ盆地の人々は どうしてヒツジ・ウシ・ニワトリではなくブタを家畜として飼養するのか。このような質問に対して、ほとんどの村人は、ブタ

は婚資や戦争補償に使えるけれども、ヒツジやウシ、ニワトリでは通用しないからだ、という意味のことを答える。では、なぜ婚資や戦争補償でブタ以外の家畜は通用しないのか、という質問には、むかしからそうやってきたからだ、という内容の答えがほとんどである。

当然のことながら、タリ盆地で昔は行われていたが現在は放棄された行動は数多い。例えば、男性の成人儀礼として、女性の目に触れることなく髪の毛をのぼしブタを川や池に沈める儀礼は、現在、完全に放棄され、儀礼の場として使われていた原生林からの木材の切り出しさえ行われるようになった。昔の男は「男の家」に住んで妻とは離れて暮らしていたのが、最近の若者は夫婦と一緒に暮らすようになった。婚資として重要な意味をもっていた貝貨は、その意味を全く失っている。そのなかで、なぜブタだけは使われ続けているのであろうか。タリ盆地においても広がりつつある原理主義キリスト教は、Suda (1997) の調査したサモ／クボ（高地辺縁部に居住する）においては村全体に広がり、人々はブタの飼養を完全に放棄してしまったという。対照的に、タリ盆地においては、原理主義キリスト教の信者でもブタ飼養を維持しているものが多い。本稿で示したように、タリ盆地にける人口増加による食料生産力の相対的低下は、しだいにブタ飼養を制限する傾向にある。それにもかかわらず、交換財として、現金獲得手段としてブタはその重要性を増しているようである。今後は、都市への移住機会が増えることで、価値観・ライフスタイルの変容がすすみ、ブ

タ飼養に対する考え方もさらに変化していくだろう。このような外部の影響あるいは内的な変化によってブタの持つ意味がこれからどのように変化していくか、変化の方向は社会ごとにどのように異なっているのか、今後の研究課題である。

## 謝 辞

本論文で分析したデータは、南高地州タリ盆地において行った現地調査によって収集したものである。調査は1993年8-12月、1994年9月-1995年3月、1998年3月、同年7月-9月、そして2000年4月に実施された。調査・研究を可能とした以下の研究助成に厚く御礼申し上げる：文部省科学研究費（研究代表者：大塚柳太郎）、日産財団研究助成金（研究代表者：大塚柳太郎）、国連大学 PLEC プロジェクト（研究代表者：Dr. Harold Brookfield）、日本生命財団（研究代表者：梅崎昌裕）、昭和シェル石油環境研究助成財団（研究代表者：梅崎昌裕）。本稿の内容は「生態人類学バネバカリ派研究会」における議論を礎にしている。研究会の参加者、そしてタリ盆地における共同研究者である山内太郎氏（東京大学）、研究の全ての側面においてご指導いただいた大塚柳太郎氏（東京大学）、本稿執筆のきっかけをいただいた篠原徹氏（国立歴史民俗博物館）、さらにはこの小論を書くにあたり有益なご教示を下さった西谷大（国立歴史民俗博物館）、菅豊（東京大学）、口蔵幸雄（岐阜大学）、稲岡司（熊本大学）、須田一弘（北海学園大学）、夏原和美（東京大学）の諸先輩方に記して厚く御礼を申し上げます。

引用文献

- 秋道智彌 1993 : 「ニューギニアにおけるブタ・狩猟と飼育の比較生態」、佐々木高明編『農耕の技術と文化』集英社。
- Akimichi, T. 1998 : Pig and man in Papuan societies: two cases from the Seltaman of the fringe Highlands and the Gidra of the lowland. *Senri Ethnological Studies*, 47: 163-182.
- Bourke, R.M. 1989 : Sweet potato (*ipomoea batatas*) production and research in Papua New Guinea. *Papua New Guinea Journal of Agriculture, Forestry, and Fishery*, 33: 89-108.
- Glasse, R.M. 1968 : *The Huli of Papua: A Cognatic Descen System*. Paris, Mouton.
- Golson, J. and Gardner, D.S. 1990 : Agricultural and sociopolitical organization in New Guinea highlands prehistory. *Annual Review of Anthropology*, 19: 395-417.
- Haberle, S.G. 1998 : Late quaternary vegetation change in the Tari Basin, Papua New Guinea. *Palaeogeography Palaeoclimatology Plaeoecology*, 137: 1-24.
- Hardestry, D.L. 1977 : *Ecological Anthropology*. New York, Wiley.
- Hide, R. 1980 : *Aspect of Pig Production and Use in Colonial Sinasina, Papua New Guinea*. Doctoral thesis, Columbia University.
- Kuchikura, Y. 1994 : A comparative study of subsistence patterns in Papua New Guinea. *Bulletin of the Faculty of General Education, Gifu University*, 30: 41-89.
- Kuchikura, Y. 1999 : The cost of diet in a Huli community of Papua New Guinea: a linear programming analysis of subsistence and cash-earning strategies. *Man and Culture in Oceania*, 15: 65-90.
- 口蔵幸雄 1995 : 「狩猟採集から農耕へ」、大塚柳太郎編『モンゴロイドの地球 (2) 南太平洋との出会い』東京大学出版会、pp.180-197。
- Meggitt, M.J. 1972 : System and subsystem: The Te exchange cycle among the Mae Enga. *Human Ecology*, 1: 111-123.
- Modjeska, N. 1982 : Production and inequality: perspectives from central New Guinea. In Strathern, A. (ed.), *Inequality in New Guinea Highlands Societies*. Cambridge University Press, Cambridge, pp. 50-108.
- Morren, G.E.B. 1977 : From hunting to herding: Pigs and the control of energy in montane New Guinea. In Bayliss-Smith, T.P. and Feachem, R.G. (eds.), *Subsistence and Survival: Rural Ecology in the Pacific*, Academic Press, London, pp. 273-315.
- 西谷 大 1998 : 「ブタとマングローブ」『エコソフィア』第1巻、pp.70-71。
- 大林太良 1955 : 「東南アジアにおける豚飼育の文化史的地位」『東洋文化研究所紀要』第7巻、pp.37-146。
- 大林太良 1960 : 「西部インドネシア塊茎・果樹栽培民の豚飼育」『南方史研究』第2巻、pp.1-54。
- 大林太良 1999 : 「オーストロネシア語族と豚の民族学」、中尾佐助・秋道智彌編『オーストロネシアの民族生物学』平凡社、pp.339-357。
- Ohtsuka, R. 1983 : *Oriomo Papuans: Ecology of Sago-Eaters in Lowland Papua*. University of Tokyo Press, Tokyo.
- 大塚柳太郎 (編著) 1995 : 「モンゴロイドの地球 (2) 南太平洋との出会い」東京大学出版会。
- Powell, J. and Harrison, S. 1982 : Haiyapugwa: Aspects of Huli Subsistence and

- 
- Swamp Cultivation. Department of Geography, Occasional Paper No. 1 (new series), University of Papua New Guinea, Port Moresby.
- Rappaport, R.A. 1968 : Pigs for the Ancestors: Ritual in the Ecology of New Guinea People. Yale University Press, New Haven.
- Strathern, A.J. 1971 : The Rope of Moka: Big-men and Ceremonial Exchange in Mount Hagen, New Guinea. Cambridge University Press, Cambridge.
- Suda, K. 1997 : Dietary change among the Kubo of Western Province, Papua New Guinea, between 1988 and 1994. *Man and Culture in Oceania*, 13: 83-98.
- Umezaki, M. and Ohtsuka, R. 1996 : Microdemographic analysis for population structure from a closed to open system: a study in the Kombio, Papua New Guinea. *Man and Culture in Oceania*, 12: 19-30.
- Umezaki, M., Yamauchi, T., and Ohtsuka, R. 1999 : Diet among the Huli in Papua New Guinea Highlands when they were influenced by the extended rainy period. *Ecology of Food and Nutrition*, 37: 409-427.
- Umezaki, M., Kuchikura, Y., Yamauchi, T., and Ohtsuka, R. 2000 : Impact of population pressure on food production: an analysis of land use change and subsistence pattern in the Tari basin in Papua New Guinea Highlands. *Human Ecology*, 28: 359-381.
- Vayda, A.P., Leads, A. and Smith, D.B. 1961 : The place of pigs in Melanesia subsistence. *Proceedings of the 1961 Annual Spring Meeting of the American Ethnological Society*, pp. 69-77.
- Watson, J. 1965 : From hunting to horticulture in the New Guinea Highlands. *Ethnology*, 4: 295-309.
- Wood, A.W. 1985 : The Stability and Permanence of Huli Agriculture. Department of Geography Occasional Paper No. 5 (new series). University of Papua New Guinea, Port Moresby.

梅崎 昌裕 (東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室)



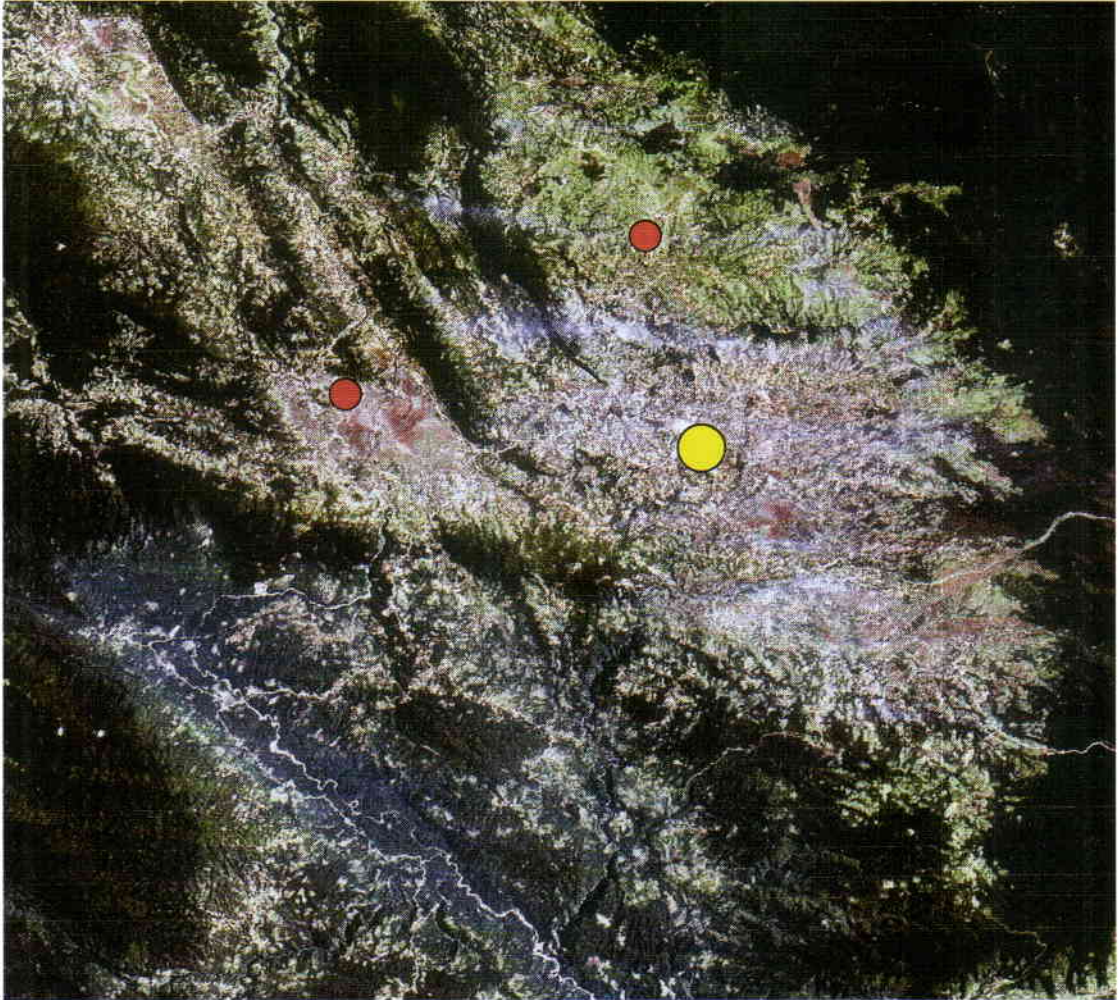


写真1 タリ盆地付近の LandsatTM 衛星データ画像 (パス 99/ロウ 64, 撮影日 1994年9月20日)。中央部の黄色い丸がタリ飛行場。北側の赤丸がヘリ、西側の赤丸がウェナニの所在地である。濃い緑色の部分が森林で、薄緑色が草原、赤っぽくみえる部分は湿地帯または畑で、白っぽい部分が畑あるいは道路である。



写真2 ヘリのサツマイモ畑。2次林を切り開いた畑には、切り株や立ち木が残されている。10年ほど耕作された後、休耕される。



写真3 ウェナニの全景。タガリ川沿いの湿地に排水溝をはりめぐらすことで土壌水分量をコントロールし、サツマイモ耕作に適した畑を作り上げてきた。





写真4 畑の周りにこのような溝を掘った個人の子孫がこの畑における耕作権を持つことになる。



写真5 ウェナニの湿地帯。遠くにみえる樹木の列に沿ってタガリ川が流れている。



写真6 ウェナニでは土壌水分量が多いため、畑の周りに溝を掘ると、そこに水がしみ出してくる。溝にしみ出した水は、行水、洗濯、料理をするための水として使われる。



写真7 畑の周りに掘られる溝のなかには高さが3メートルを超えるようなものもある。



写真8 サツマイモを植え付けるマウンドを女性たちが協力して作っている。協力のお礼に現金が渡されることも多い。



写真9 マウンドの中には、肥料としての草が鋤き込まれる。この草の量と、収穫されるサツマイモの量との間には正の相関関係が観察される。





写真10 サツマイモの蔓は、3-4本の束にして植え付けられる。この蔓の善し悪しでサツマイモの収穫量は大きく変動するといわれる。また他の地域からの新品種サツマイモは蔓の形で持ち込まれる。



写真11 2次林を開いて作った肥沃な畑には、集めた落ち葉を覆うように直径30センチメートルほどの小さなマウンド(ティンディニ)が作られる。このマウンドは生産性が高い。しかしながら、ヘリなど2次林の減少が著しい地域では、ティンディニをみることも少なくなった。



写真12 放し飼いにされているブタが畑に侵入するのを防止するための高さ1.5メートルの柵。中央に立っている男の左右には畑が存在する。



写真13 収穫の終わった畑に繋がれたブタは、鼻を使って地面を掘り返し、残っている小さなサツマイモや地虫を食べる。



写真14 湿地帯に放し飼いにされているブタ。



写真15 昼寝をするメブタ。





写真16 土地争いの和解に集まった人々。話し合いが決裂した場合に備えて、それぞれのグループの後方では弓矢で武装した男達が待機している。このケースでは、和解が成立しブタを殺して石蒸し料理が行われた。



写真17 石蒸し料理（ムームー）に使う石を焼いているところ。この後、地面に掘った穴に焼けた石をしきつめ、葉っぱを敷いた上にブタ、サツマイモ、カボチャなどをのせていく。水を加えてからそれを葉っぱで覆い、最後は土をかぶせて蒸し焼きにする。



写真18 ブタは表面の毛を焼き焦がしたあと、腹開きにされる。その場面において最も尊敬されるべき男性には頭の部分が配分される。



写真19 この手作りの散弾銃は、自動車のシャフトを利用して作られている。散弾銃が使われるようになって以来、戦争期間が長引く傾向にある。



写真20 タリの飛行場にポートモレスビーからの飛行機がくると、タリの町中から見物人が集まってくる。この飛行機に乗って首都ポートモレスビーに行くのは、多くの若者にとってあこがれの夢である。



写真21 現金経済の浸透ともなっていて、タリ盆地においても様々な物資が手にはいるようになった。これは、飛行機で運ばれてきた、靴とタバコ。





写真22 著者を見物にきた村の女の子。



写真23 タリ盆地においては、他人の畑に無断で立ち入ることは、その人に対する宣戦布告を意味する。したがって、公共の道路が作られる前は、畑の周りに掘られた溝が道路代わりに使われていたといわれる。



写真24 長雨によるタガリ川の氾濫で水没したウェナニの畑。



写真25 ウェナニの広大なサツマイモ畑。



写真26 フリの若者。このような伝統的なスタイルは、現在でも正装として通用する。タリ盆地選挙区における国会議員選挙ポスターには、伝統的正装の顔写真を載せている候補者も多い。

---

# Pig Rearing among the Huli in Papua New Guinea Highlands

---

Masahiro Umezaki

---

In the Tari basin in Papua New Guinea Highlands, where the Huli speaking people have heavily depended on sweet potato cultivation and pig rearing for their subsistence, the adaptation system have changed under the process of modernization commensed in 1970s. In the present study, the author examined the meaning of "pig rearing" paying special attention to the changing process during these several decades. The findings are surmarized as follows: (1) the nutritional importance of pigs has decreased. (2) Per capita number of pigs reared has decreased due to land shortage and consequent decrease in food production, though (3) the number of pigs used as bride price or war compensation has increased. Population growth, increasing disputes between groups, the utilization of purchased foods, enlargement of regional network, and dependency to cash ecomony may explain such changes. It was concluded that the ecological demand for pig rearig have decreased, while the social demand have increased among the modernizing Huli in Papua New Guinea Highlands.